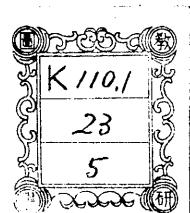
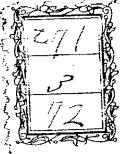
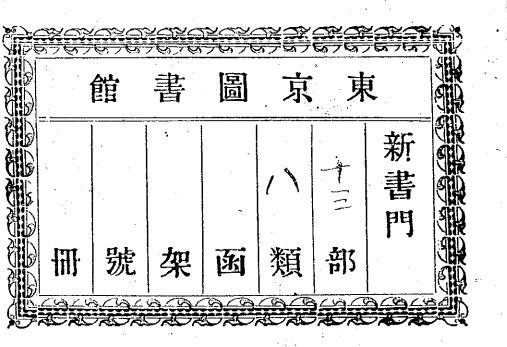


# 新小學修身書

櫻老加藤熙編  
初等科之部

卷五



櫻老加藤熙編

新刊  
小學修身書卷之五

版權所有 時習堂藏

刻新 小學修身書卷之五

櫻老加藤熙 編

第一事君

○韓魏公外小在りと雖も。然きども其心常小社稷よ係る。身老る小至て而て心益篤。病と雖も國家を忘れず。或い時りりて祖宗比一法度を更め。朝廷の一紀綱放壞るを聞けば。則ち泣血し

て終日食へば。自警編。

○宋比王郁官となり。仁恕あり。將小死せんと。家人よ告げて曰く。吾れ官を歴て五十年を踰ゆ。刑を用ゆるを慎み人を活うすこと多し。後必らば興る者有り。其を吾が孫ふ在る。孫の欽若果して。進士小擢られ。相ふ拜す。坦園三子紀詠

## 第二言語

○言が以て人を傷つくる者。刀斧よりも利あり。術を以て人を害する者。ハ。庸狼よりも毒有り。言慎まざるべからず。術慎まざるべからず。省心錄

○俗語ハ市小近く。纖語ハ娼小近く。諱語ハ優小近し。士君子一涉せば、此を獨り威を損むのみあらば。亦福を迓ひ難い。長者之言

第三躬行

○木養ふ所。往れば。則ち根本固ふ。一。枝葉茂り。棟梁の材成る。水養ふ所。往れば。則ち泉源壯ふ。一。而一。流派長く。灌漑の利博。人養ふ所。往れば。志氣大。小。一。而一。見識明か。忠義の志出づ。養へざる可んや。省心錄

○婦女。衣錦惟潔淨を務む。尤も衆小異あるべ。あらば。且つ十數同一。處る。ク如き。而一。一人。比衣飾。獨り異なり。衆小指目せらる。否。其行坐能く安きや。いぢや。同上。

○昏禮。萬世の始あり。故小婦。ノ。者。信實を德とす。一。ノ。ビ。昏禮をあせ。身を終。ア。改めば。夫死。キ。再び他人。小嫁。ア。ズ。禮記

○婦女の舅姑小事  
ること。柔順ふりて  
意ふ逆はず。婦たち  
道を失ふづらひ。

胡璫家訃

#### 第四 誠實

○信の行の基あり。  
行の人は本あり。人

行ふざれば。以て成ること有。行  
信ふ非ざれば。以て立つこと有。故  
ふ行の人ふ於け。譬へば濟りの猶舟  
の楫を待つぐ如もあり。博覽古言

○高く一て欺くづめらざるものい。天  
あり。尊く一て欺くづめらざるものい  
君あり。内か一て欺くづめらざるもの  
の親あり。外に一て欺くづめらざるもの



ハ人あり。四者ハ既小欺くべからば。心其を欺くべけんや。心欺クズ。人其れ我れを欺クんや。省心錄

○人の心を存立。忠厚あるべし。必らば言を立つて。忠厚。言を立す。忠厚ちう多もの。必らば事を作ても。忠厚なり。身必らば忠厚。福を享け。子孫必らば忠厚の報を食む。魏環溪庸言

第五 忍耐

○人拂亂の事ふ遭ふて。愈々當す。心を動う志。性を忍び。其能いさる所を増益を。行ふ所。室礙の所。りて。必らぞ以て之を通せんこと有るを思ひば。則ち智益明あり。讀書錄

○水柔ふ。石剛あれども。石。水。爲め。水漸く浸されて。蕩薄ちうこと之れ久志

けれど錯削剥落を剛も柔も勝つこと能はずこと此卷亦見るべし。同上

○忍の一字い。衆妙の門族を睦一。事を處すに尤も先務となす。若も清儉れ外更ふ一忍を加へば。何事う辯ぜざらん。同上

## 第六學問

○學を爲き最も實を務めんことが要

一理を知るべし。則ち一理を行ひ。一事を知るべし。則ち一事を行ひべ。自然ふ理事と相安ふべし。虛應不切の患を。讀書錄

○看得より。學をすまに別法あり。只是一事を知れば。一字を行ひ一句を知れば。一句を行へば。便ち益なり。同上

○學を爲すは工夫べ。日用の外ふ在ら

ば。身を檢へ則ち動靜語默。家ふ居れり。  
則ち親小事一長を敬す。理を窮むきば。  
則ち書を読み義を講す。大抵只一箇比  
是非を分別へて。而して彼を去り此を  
取るを要むるのみ。同上

○北史斐諱の字。士正。少へて儒學を  
好み。褐を太學博士。小釋く。常て常景小  
從て書百卷を借り。十許日かへて便ち

返す。景其讀む能ハざらを疑ひ。毎卷策  
問をさふ應答遺す。十七史蒙求

### 第七 處事

○理ふ順ふて而して行ふこと。則ち  
直ふて而して易く。理ふ逆ふて而  
て行ふこと。則ち曲かく。而して難  
し。讀書錄

○事最も輕忽ふす。うらば。至徵至易

のものと雖も皆當さる慎重を以て之を處すべし。同上

○凡そ爲之所當さにて理ふ合ふこと求むべし。曰ふ勿き。今日姑らく此くの如く。明日之を改めんと一事苟もまきば。其餘の苟もせよろい有。同上

○非理外より至れば。當さに席を防ぐ如くすべし。即時かして而して避け。

格獸は勇を持む勿き。非理内より起らべ。當さ小湯が採るべ如くすべし。即時かして止め。染指の欲ふ從ふ勿れ。袁氏訃事審らうに處せんと要すと雖も。然きども亦揣度過了す。事人の説を聽從せんと要すと雖も。亦人の爲めか惑亂せらるべからず。擇ふこと湧らく精あるべく。行ふと湧らく果あ

るべし。居業錄

○汲々焉と一と速うぢりんと欲を否  
母れ。循々焉と一と敢て惰る母れ。止  
學問此の如きのみふ非を。日用事物の  
間。皆當さふ此の如くあるべし。乃ち能  
く成るぢりん。許魯齊語錄

第八交際

○善を責むるは朋友比道あり。只須ら

く懇到切至以て之ふ告ぐべし。然らば  
して徒らふ口舌ふ資へ。以て仇とぢれ。  
益たまあり。

○古人朋友を言ふて。交善と曰ふ。近日  
交善有。所謂交善ある者ハ。狎る、耳。  
狎玩ハ是習氣の最も重大害あまに似  
て。而して道德禮義實小虧損せざるあ  
。頼古堂藏書

○朋友。倫を傷け化を敗るを除くの外。寧ろ十分か他を責むべし。一分も他を薄んざつうらす。我き他を薄まろの意からば。則ち誠意已か衰ふ。正言尚りと雖も。人を感じる能ひば。且つ怨を招き易し。魏叔子日錄

○親族。隣里居地。甚だ近く。凡牲畜の侵害。僮僕は爭鬭。言語の相角。行事は錯悞。

勢盡し免る能ひず。惟心を體し。彼此相容るふ在り。但己れふ反求して。人を責むべからば。若志小忿をひぢんば。遂か嗔怒を生ト。必らず然相尋て致し。終ふ了る時。たゞづらん。願體集

○己れを待つもの。當さか過ちなきの中より。過ちたるを求むべし。獨り徳を進むのみあらば。亦且つ患を免れん。

人を待つもの。當きか過ちらるのみあらず。亦且つ怨を解ん。同上

○大常少卿希亮陳公財を輕ト施を好み恩義ふ篤ト少ふ一ト蜀人宋輔と游ぶ輔京師ふ卒去母老ひ子少カ一其母を養ふこと終身カ一ト而一ト女を以て其孤端平ふ妻ハ一諸子を游學せあむ卒ふ子沉同と進士第ふ登る名賢彙編

第九 勸善

○善人と同く處るとぞれハ則ち日ふ善訓を聞き惡人と從ひ遊ふとぞれハ則ち日ふ邪情を生む蓬麻間ふ生されば扶けぎりして自ら直し白沙淄ふ入るときハ染めまきて自ら黒ト博覽古言

○不善を顯明の中小爲すものハ人得て而一ト之を誅去不善を幽間の中小

爲吉キのハ。神得て而一イテ之を誅キ。人  
小誅セラリ者ハ。其禍淺シ。神小誅セ  
ラリ者ハ。其禍深シ。頼古堂藏書

#### 第十 剛毅

○身心を收歛檢束)テ。細至微至靜至  
定の極ハ至ルバ。事を作ること愈々力  
有リテ。凝定靜密自ら馳せず。讀書錄

○人ハ當さハ自信自守キベ。之を稱

譽ム。之を恭奉キ。雖も亦之ウ爲メハ  
沮を加ヘズ。同上

○石中の火ハ。石自ら之を生一イテ而一  
イテ終ハ之を以て自ら焚ク。木中の蠹  
ハ。木自ら之を生一イテ而一イテ終ハ之を  
以て自ら害キ。故ハ士君子の氣骨ハ。堅  
き才貴ハナリ。頼古堂藏書

#### 第十一 警戒

○人我きふ負く時。我れ當さふ吾れの負くを致す所以を思ひ以て自ら反し。且つ以て切磋砥礪の地と爲すべし。我れふ於て多少益なり。烏くか之を仇視を容けん。

○人を責むるものに交を全ふぞ。自ら恕まろやのい過を改めば。自ら滿るものに敗き。自ら矜う者ハ愚。自ら賊ふものに害なり。多吉利を獲る。黙して而一々害たまふ如うべ。省心錄

○夫れ石ハ玉を攻むべし。塩ハ金を治むべし。魚ハ錦を濯ふべし。灰ハ布を浣ふをべし。物固より賤を以て貴を治め。醜を以て好を治むるものなり。則ち物の賤且つ醜あるもの。何ぞ之を輕視吉けんや。頼古堂藏書

○看來り看去る。吾人比千病百痛。只是よく之う胎を爲す。做志來り做一去る。吾人比趕て聖賢か上らざアタ所以ハ只是よく之ゲ崇りをあん。讀書錄

○人比德性ハ。天資小出つるをの各偏うち所ナリ。君子ハ其偏を各所ナリ哉知る故小學問を以て一而一て之を補ふ。則ち全德の人とたり。情ハ任ト事

を行ふ。故ハ失多一。袁氏家訓

○人の一身。日ハ食主る。一升ハ過ぎ。終年衣主る。所一兩匹ハ過ぎ。禮儀雜費の若きも歳計亦數ナリ。此を誠ふ切身闕くづくらば。同上

○人家子弟。君子を近づけて而して小人を遠けんと欲し。君子を近づけハ。則ち多く長厚は言を聞き。多く端謹比行

を見る。自然薰習日か深ふべし。徳性循謹なり。小人を近づけば則ち浮華の言。刻薄の行。耳目か接して而して身心か染む。子弟の淳厚なる者と雖も亦將か之と俱か變ぜんとれ。同上

○子弟ハ。父兄の勢を挾て以て人を凌ぎ。又丈夫ハ。妻妾財を憑て而して富を致せば。有識士ハ。與よ伍を爲吉哉

羞るふ論あり。即ち父兄妻妾も且つ竊小之を笑ふ。頼古堂藏書

○名利比人を壞るハ。三尺比童子も皆之を知る。而して名を好むの過ぎハ。又人を一々復君父を顧みざらしむ。世人命を妨げ以て身を潔ふ。朝廷を訕て以て直を賣る者の如く。是忍ぶべく。孰う忍ぶ。一ウラガラん。畜德錄

○性情苛戾ちきのい。能く骨肉を一  
て相親すがざらしむ。况や遠きものをや。  
和平ちうる者い。能く仇家をノ。其怨を  
忘れしむ。况や平人をや。日錄

## 第十二 改過

○人は過失ならひ。猶身の疾病ならび  
如し。之を攻むるふ藥石を以てし。之を  
誨ひ。小廉恥を以てまわれば。過失と雖  
も賢者たゞか害ならば。疾病と雖も全  
人ゝ多々失ひば。省心錄

○士大夫は口を開き。足を動クす。罪過  
懺悔は法からば。必ずし。惟慚愧を  
以て第一とす。惡人い是をし。ざるべ  
べ只妨げざと説き。毫も慚愧の意あり。  
終小過を改むるの時あき所以あり。頼  
堂藏書

○日用飲食湏らく慚愧を知るべ。蓋一耕さざりて而して食ふ。己小薄福消志難き我覺ふ。况や復揀擇して精を求むるハ過てり。袁氏家訃

○過を改むる人ハ天氣新晴也如く。一般自家固より自ら灑然たり。人之を見る亦分外小喜ふべ。思辨錄

○魏鄭公薨モ。唐の太宗自ら碑文を製

ト。并せて自ら之を書。後ち讒言せられ。詔して碑を仆。も高麗を征し意の如くをりざるか及び深く仆をづらきを悔ひ。乃ち歎いて曰く。若一魏徵たらば。必らば我を了て此舉たら志めどと。既小遼水を渡り。驛を馳せ。祀。少牢を以てせしめ。復石碑を立つ。孝  
集靈

K110.1 - 265.2

新刻小學修身書卷之五

明治十七年九月廿九日版權願  
同年十月十三日版權免許發兌

福島縣士族

定價八錢

編輯人

加藤熙

東京府士族

小石川區上富坂町十四番地

出版人

松井方景

牛込區下宮比町九番地

出版人

寺田新助

茨城縣平民

新治郡土浦仲城町六十八番地